

《論文》

キリスト教社会事業と羽仁夫妻の理想の社会 — 1930年代初頭における『婦人之友』を中心に—

福原 充

I はじめに

1. 研究の目的

本研究の目的は、1921年に自由学園を創立し、社会改造運動を展開した羽仁吉一・もと子夫妻（以下羽仁夫妻）が目指した理想の社会をキリスト教社会事業との関わりを通して検討することである。

日本近代教育史では大正デモクラシーに支えられて展開した、「大正新教育運動」「第一次新教育運動」「大正自由教育」等に代表される戦前期の新教育運動が、重要な研究対象の一つとして現代まで研究され続けている¹。

中野（1968）は「大正自由教育運動の教育方法の『近代化』に果たした役割」²に注目し、戦前期の新教育運動が現在に残した遺産を読み取ろうとした。羽仁夫妻が創立した自由学園も同運動を推進した学校の一つとして知られている。

大正自由教育運動は、主に都市部の新中間層の支持を背景とした、学校内部で展開される教育改造や学校改革運動として評価されてきた。しかし、教育の世紀社が社会改造運動を展開するにあたって、1924年に池袋児童の村小学校を創立したように、「醗酵醗醸作用の促進運動」³を実践する機関を目指して誕生した学校も存在する。当時の新教育学校には、教育によって社会改造を実現させようとした一面がある。

教育の世紀社の場合、それは同社の同人たちが「啓明会や教育擁護同盟など、政治運動ないしは教育制度の改革運動の担い手」⁴であったことに

も関連している。彼らは近代化に伴う資本主義社会の弊害に直面したことをきっかけに、各諸団体との連携をとりながら展開する、教育方法からの社会改造を目指したのである⁵。このように、新教育学校誕生の背景には、当時の社会問題を教育によって改善するといった共通の課題と共に、学校を創立するまでに至ったそれぞれの活動基盤が存在する。

本研究で注目する自由学園は、羽仁夫妻の娘が女学校へ入学する年齢を迎えたことが契機となり、自分の娘と都市部の新中間層による教育要求、近代的な実生活から乖離した学校教育の現状を打破するために創立したと考えられてきた⁶。しかし、福原（2014）が指摘したように、自由学園の創立と教育展開の基盤には、キリスト者であった羽仁夫妻が明治期から積極的に参加してきた、キリスト教社会事業の経験が深く関係していたと考えられる⁷。

もと子は、報知新聞社の記者であった頃からキリスト教婦人団体である日本キリスト教婦人矯風会（以下矯風会と記す）の会員として、その社会活動に参加していた事実がある。矯風会は女性の社会進出を目指し、明治期より家庭から社会を改造する姿勢の必要性やその機会を提供することに力を注ぐ婦人団体であった。同会は廃娼運動や禁酒運動を中心とし、全国に婦人会を組織することで集団的な社会活動を展開させていた。

もと子自身が矯風会の活動に参加していたという事実は、結果的に、夫婦で初めて編集を任された雑誌である『家庭之友』（1903年創刊）に、矯風会の機関誌的役割を与えることになったのである。

福原（2014）は、『家庭之友』と矯風会の社会活動との関連性をみていくと、同会の組織的な事業展開と活動方法が羽仁夫妻の思想に多大な影響を与え、自由学園の創立と羽仁夫妻が展開する社会事業の基盤となっていたことを指摘している。それは、自由学園という学校も、池袋児童の村小学校と同様に、教育による社会改造を目指す新教育学校であったことを意味している。

大正自由教育運動それ自体は、日本国家全体が戦時下へ突入していく過

程で「大正期におけるいわゆる大正デモクラシーに支えられて発展した自由教育（運動）は、昭和にはいり、一九三〇年前後にいたって理論的にも実践的にも一応終焉をとげたとみななければならない。」⁸という評価が一般的ではある。

しかし、当時の新教育学校に教育による社会改造の実現という目的があったとすれば、各々の新教育学校が目指した社会とは何かを明らかにし、従来の先行研究にみられるような学校内部での教育展開だけではなく、学校外の社会にむけて具体的にどのような活動を展開したのかを検討する必要がある。

大正自由教育運動で展開された、学校の内外における教育活動を社会との相互の関係性から検討することで、同運動を再評価したいと筆者は考えている。

2. 研究対象と研究方法

既に述べたように、自由学園は雑誌記者兼編集者であり、キリスト教者であった羽仁夫妻によって創立した私立の女学校（各種学校）である。羽仁夫妻は自分達の会社である婦人之友社で多数の雑誌を発刊しながら、同学園を創立し、1927年に自由学園小学校、1935年に男子部、1939年に幼児生活団、1949年に男子最高学部、1950年に女子最高学部（現在は共学）等を創立し、その教育機関を拡大してきた。また、雑誌読者によって結成された婦人団体「友の会」（1930年設立）による社会活動も展開している。

羽仁夫妻における事業の最大の特徴は、自分達が展開する社会活動を学校教育や他の諸団体と連環させて展開したことにある。中内（1976）は自由学園の教育展開を「キリスト者羽仁もと子らの自由学園（一九二一年開校）のように、大衆運動に卒業生ともども参加し」た学校として評価している⁹。

本研究では、1930年代初頭において『婦人之友』に掲載されたもと子の記事を中心に、羽仁夫妻が目指した理想の社会を検討する¹⁰。

1930年代は齊藤（1988）が「私はもと子の最大の功績は生活合理化にあると思っている」¹¹と述べているように、羽仁夫妻の事業がひとつに結実した時期でもある。それは、大正自由教育運動の変遷との差異から考えても興味深い。

1931年に自由学園は創立10周年を迎え、同年より、日本各地で家庭生活合理化展を開催した。そして、1933年という年は、もと子が約一年に及ぶ海外旅行から帰国し、羽仁夫妻の事業（雑誌）が建業30年を迎えたことを契機として、今後の自分達の方向性を明確に示した節目の年でもある¹²。この時、もと子61歳、吉一54歳であった。

社会改造を強く意識し、その実現のために教育方法と社会活動を連環させて展開した自由学園とその基盤にあるキリスト教社会事業の性質を検討することで、一つの新教育学校が目指した理想の社会に迫りたい。

Ⅱ キリスト教社会事業と自由学園の教育

1. キリスト教社会事業の特徴

矯風会ともと子との関係については、先に述べた福原（2014）の研究成果に詳しく記されているのであまり述べない。まず、ここではキリスト教社会事業の性質と自由学園の教育との関係性を確認する。

先に述べたように、もと子は明治期から記者兼編集者として活動しながら、社会活動にも参加していた。今回の調査で、もと子は婦人の社会活動機関であった矯風会の他にも、廓清会に評議員として参加していたことが分かっている¹³。

廓清会は「廓清会規則」第三条に「本会の目的は公娼制度を廃止し推して男女間に貞潔の徳操を進むるにあり」と記されているように、公娼制度の廃止を目指して、東京市神田区美土代町の東京基督教青年会館内に1911年に創設された¹⁴。

評議員には本部顧問も務めた大隈重信の他、本多庸一、嘉悦考子、植村

正久、山室軍平、矢島揖子、福島四郎、江原素六、安倍磯雄等、キリスト教者やキリスト教に理解のある者が多い¹⁵。またそれだけではなく、後の羽仁夫妻の事業に協力した者の名もいくつか記されていたことも重要な点である。廓清会内でのもと子の活動内容は定かではないが、『廓清』にはもと子の記事がいくつか掲載されていることがわかっている。

社会事業史の先駆者である生江（1931）は、もと子が参加していた矯風会や廓清会等の社会活動について、これらの団体がキリスト教社会事業を実践してきたと指摘している¹⁶。それは、近代化に伴う時代の変遷により、各宗教の慈善活動の内容も変遷したことを意味していた。

近代の資本主義社会が生み出した、格差等に代表される多様な社会問題は、それを改善するための「社会政策的社会事業」、つまり個人ではなく集団を対象とした社会事業へとその性質を変遷させていったのである¹⁷。この近代（日本においては明治期から）における社会事業の特徴を生江（1931）は以下の四つに分類して説明している。

第一に、「予防は治療に勝る」との観点から、「治療的より予防的方針」を進める傾向が強い点である¹⁸。「事件の根本に触れよ、之を徹底的に解決せよ」との考え方が当時の社会事業家共通の認識であったようで、社会にくすぶるあらゆる問題を事前に除去することで、「一般福利を増進」させようとしていた¹⁹。

第二に、活動の性質が「常識的取扱いから科学的取扱いに向つて来た」²⁰ことである。近代化はそれまでの推測や個人的感情に偏った慈善事業に、社会的調査や合法的処遇法などによる科学的対応、つまり「科学的研究が先づ第一の要件である」という認識を与えたのである²¹。

第三に、「無組織的から組織的」²²な活動へと変遷した点である。それは科学的研究方法によって問題を解決していくという性質上、組織的に行動すべきとの考えからきている。事実、近代の社会事業は全ての人間が一人の社会人として健全な生活を過ごせる環境を創りだすことを目的に、「極力単独行動を避けて、社会各般の施設が相互に連絡を保ち且社会各方面の

当事者、各階級の識者と相提携して以て保護救済の最高最終の目的に到達せんとする傾向」があった²³。

第四に「保護救済の方針が物質的より精神的に向つて来た」ことである²⁴。それは、セツルメント等による社会事業の経験から、単に物質を一方的に与えるのではなく、「要救護者の生活状態を精細に調査して、彼に忠言をなし、物の代りに智慧を給し、金の代りに職業を興へて、以て自助自立の方法を講ずる」ことが社会事業一般にとって重要であると認識されるようになったことを意味していた²⁵。

生江は、以上の4点が明治期から変遷してきた社会事業の特徴であるとしているが、さらにキリスト教社会事業の場合、そこには「『神の国』」を実現するという目的があったと以下のように説明している²⁶。

基督教的神の本質は『愛』であり、其の社会思想の中核を成すものは実にその『愛』を唯一の律法とする『神の国』の思想である。一略一而してその『愛』とは単り自然の社会的本能を指すものではなくて、宗教的動機と力によりて人の心霊の中に営まる、神の生命の表現であるとされる。従つてそれは決して静的なものではなく、また単純なる情熱でもない。それは正に行爲であり、奉仕の実行であり、而して絶えざる活動でなければならぬ。故に基督教の信仰に立つ者は常住不断、他人に向つて愛の創造的行爲を行はねばならぬ。尚基督教に在つては神に対する愛と人に対する愛とは同格であるとするのである。一略一即ち基督教的愛の対象は神であると共に我自身であり、またあらゆる隣人同胞であつて『汝力を盡し、思いを盡して、主たる汝の神を愛すべし、また己のごとく汝の隣を愛すべし』とは実に基督教の根本精神であるとされ、之を法則とする『神の国』を此の地上に建設せんことは基督教会の一代使命であるとされてゐる。

キリスト教社会事業にとって重要なのは、「『愛』を唯一の律法とする『神の国』」を実現させることであつた。そして、その実現ために、組織的な

社会活動によって絶えず事業を展開させていくことが重要視されたのである。その意味において、女性の社会進出の機会を提供した矯風会や、廓清運動を展開した廓清会、救世軍等のように、広範囲における社会事業を実際に当時から展開していたという事実は、生江が指摘したキリスト教社会事業の特徴にあてはまる団体であったとすることができる。

しかし、生江が指摘する『『愛』を唯一の律法とする『神の国』』の社会とは具体的にはどのような社会なのだろうか。

2. 社会改造思想と自由学園

既に指摘したように、自由学園の創立の基盤には、羽仁夫妻が参加した明治期における矯風会や廓清会等といった、キリスト教社会事業の影響がある。羽仁夫妻は自由学園を創立した後も、自分達の教育実践の成果を学校内に留めようとはせず、実社会と積極的に関わることでその教育実践を更に学校の外に向かって展開させようと試みていた。

教育活動を学校内に限定しない姿勢は『友の会レポート』第一号からもみることができる。同誌には「さて私どもの自由学園は本年四月を以って創立満十年に達しました。僅かの年月の間ではありますが、特に思ふところあって、この間のありのまゝの事実を、先輩友人並に我国の教育に関心を有らるゝ方々を通して、我々の愛する社会に感謝した報告しなくてはならないと思ひます。」といった挨拶文から、学外の人物に向けた「自由学園創立十周年報告会」のプログラムが掲載されている²⁷。

自由学園創立十周年報告会

五月二十日（水） 自由学園に於いて

午前十時 第九回卒業式

午餐

午後一時 報告会

- 一、知識取得の目標とその方法について
- 二、生活実践の内容とその組織について
- 三、以上二方面を総合する学校全体の精神について
- 四、学校経営について
- 五、卒業生の事業について
 - a、消費組合
 - b、農村セツルメント
 - c、託児所
 - d、工藝部
 - e、友の会

興味深いのは、この「自由学園創立十周年報告会」が卒業式と併用で開催されていることである。同会でのプログラムを見てみると、卒業式それ自体よりも同学園の教育展開や卒業後の事業を発表することに重点が置かれていたことが読みとれる。特にプログラムの五・eをみると「卒業生の事業」とともに、学外組織である「友の会」の事業紹介も全体のプログラムのなかに用意されていたことがわかる。

「自由学園創立十周年報告会」と題された会ではあったが、羽仁夫妻が中心となって展開するキリスト教社会事業にとって、学校という教育機関は同事業を展開する組織全体の中核であったと考えることができる。そのため、同じくキリスト教社会事業を展開する組織であった、学外の「友の会」事業等を同会で報告することは、羽仁夫妻にとって自然なことであったといえる。

また、もと子は1930年に創立した新教育協会の会員となり、同会の日本代表の一人として、1932年にフランスのニースで開催された第6回世界新教育会議に出席している。彼女は創立10周年を迎えた自身の学校の変遷とその役割を同会議で以下のように発表した²⁸。

自由学園十年間の生活と勉強によって出来つゝある、今の日本としての能率的合理的な日常生活法を基礎として、更に一般的に必要な研究及び知識を加へ、『家庭生活合理化展覧会』といふ名の下に、昨年十一月まづ東京に開期三週間の展覧会を開きました。一略一自由学園は前にもいつたやうに、個人と社会の間に家族生活を置くことを、非常に重要と見てゐるものですから、卒業生に対しても、よき結婚生活に入ることを第一に希望してゐます。一略一それと同時に、婦人がその力を、直接に社会に献ずることは、社会のためにも、婦人自身の發達のためにも、実に大切なことです。一略一いま一つ、私たちの卒業生のいろいろの運動が、このやうに着々と社会に打建てられてゆくのは、すべて事業を自治自労を基礎として経営してゆくからです。さうして他の理由は、彼等の見のがすことの出来ない精神的後援者のあることです。それは外ではありません、彼等の家族です。さきに子供たちのしてゐることを危ぶみ氣遣つてゐた父母たちの大部分は、今は実に有力な後援者になりました。次に、我々の雑誌『婦人之友』の愛読者が、自由学園及び卒業生の活動に刺戟されて、日本の各所に『友の会』と稱する団体を造るやうになりました。学校と共に『思想しつゝ生活しつゝ祈りつゝ』といふ標語を用ひ、略してT・L・Pといつてゐます。これも学校内の働きが社会に反響してゆく一例だと思ひます。不十分ながら、以上の私たちの短い間の実験によつてすらも、学校が社会に働きかけてゆくことが、学生個人のよき教育であると同時に、社会改造の最も適確な正道であると信じ得るやうになりました。どうか学校は単に社会に人材を送り出す所であるといふ思ひに代へて、教育は新社会をつくるものであるといふ信念を打建て、行きたいと思ひます。

ここで特筆すべきことは、もと子の教育思想がいわゆる「児童」のみに焦点をあてたものではなく、その「卒業生」や「父母」、さらには自由学園とは別団体である「友の会」を連携させて行ふ社会活動にも目を向けていることである。「学校は単に社会に人材を送り出す所」でないとしたも

と子にとって、学校教育の役割は他の諸団体との連携は図りながら展開させていく、「新社会をつくる」ための組織であった。

羽仁夫妻にとって学校もまた社会であった。そして、キリスト教社会事業を基盤に誕生した学校だからこそ、社会に働きかけるための社会活動組織を造ることが必要であったといえる。

また、一方においてこの団体は、誰でも参加できる環境ではあったが、自由学園や婦人之友社をはじめ、羽仁夫妻から強く影響を受けた関係者が大多数を占める、ある種特殊な組織であったと考えられる。羽仁夫妻が展開したキリスト教社会事業は、教育の世紀社のように、同人のそれぞれが多様な活動を展開していたというわけではなく、羽仁夫妻が組織した団体を軸に多様な活動展開をみせるのである。ニースでの講演では、卒業式の前々日に、その年自由学園を卒業しようとする生徒たちが羽仁夫妻のもとを訪れ、「学校と同じ意味の社会を、一般社会に向けて打建てるべく奮闘する決心をした」²⁹と自ら語ったとされている。しかしそれは、羽仁夫妻自身も強く望み、学校生活のなかで生徒達に求め続けていた姿でもあったのである。

そして、これらの活動の最終的な目的がキリスト教思想を重視したものであったことにも注目する必要がある。もと子はこの講演のなかで「世界人類の共に負ふべき最大の使命は、すべての人類が、その造り主を父とするキリストの宗教、即ち神の国神の大家族を造らうとするところの、キリストの宗教の完成であると信じます」³⁰と宣言していた。

これは、これまで確認したキリスト教社会事業の特徴が目指していたものと同質のものであることがわかる。自由学園を創立した羽仁夫妻にとって、自由学園とは神の国を実現するための人材の育成を兼ね備えた社会改造機関だったといえることができる。

しかし、羽仁夫妻が神の国の建設を目指していたことをその文面や実践記録から理解できても、その目指した社会は具体的にどのような社会なのかについては、生江が述べた文面と同様に想像することが難しい。

Ⅲ 羽仁もと子の目指した社会

ニースでの講演も含め、もと子がおよそ一年間に及ぶ海外旅行をした時期はちょうど満州事変が勃発した時期でもあり、世界から日本が孤立し始めていたときであった。また、もと子は1932年の12月に帰国したが、その翌年には、日本は国際連盟を脱退するといった状況に追い込まれていた。国内では長野県の教員赤化事件や思想問題対策協議会が設けられるなど、ますます自由な言論や思想が圧迫されようとしていた。さらに、昭和恐慌といった経済面での大問題も追い打ちをかけ、多くの市民が厳しい生活環境に直面し、時代の危機感・抑圧感を感じる時期であった。

1933年の『婦人之友』一月号は、146名の著名人より「世界からなくしたいもの」は何かという質問を投げかけ、それぞれの回答を掲載している³¹。古屋信子や市川房枝、土田杏村、生江孝之に山室軍平の他、多くの著名人がなくしたいとしたのは、戦争や貧困、不平等な社会状況であった。

このような厳しい時代背景に影響されてか、もと子は同年に開かれた友の会の開会式において、自分達の使命を以下のように語っている³²。この時、友の会は会数120、会員4,700人の一大婦人団体となっていた。

我々はたゞ人の良心を動かすことより外に世界改造の方法はないと、どこまでもさう考へるものです。そう信ずるものです。一略一ある人は婦人之友は赤といひます。精神的の意味において、人の中に階級のあることを気にすること、精神的にも物質的にも私有慾を憎むこと、それが赤といふものならば、私は甘じて赤といはれませう。婦人之友はナショナリズムだと或人々はいひました。或は国際連盟について、或はニースの会議の支那の代表や、アメリカの婦人たちと話した私の言論についてです。あゝいふことがナショナリズムなら、私はたしかにナショナリストです。誰が私たちにこの肉の生命を與へたのですか。何が私たちの日々の生命を支へてゐてくれるでせう。私の心は決して血肉を離れようとしません。決して決

してこの国を離れようとはしません。離れようとしなければかりでなく、私は私の子供を愛し、私の家を愛し、私のこの国を愛します。だから私はナショナリストだといへるのです。多くの人は私たちを自由主義者だといひます。さうです。私は自由を愛します。本当に自由を愛します。私は人から圧迫されることが大嫌ひです。さうして人を圧迫することも大嫌ひです。しかし私たちはナショナリストではありません。コンミニュニストではありません。自由主義者ではありません。すべての人類が神を中心とし、神の愛とみ業に励まされて動くことによつてのみ、我々の良心が鋭敏になり、ありとあらゆる能力が與へられ、成長し、強くなり得るものであるといふ立場です。一略一友の会の目的は神の国の建設にあると、早くから我々はいつてゐます。さうしてキリストはそのリーダーです。このリーダーを無視しては、人と人と決して本当に協力の出来る譯はありません。讚美歌を歌ひ、聖書を読み、型の如く儀式を守るのがクリスチャンではありません。どこまでもどこまでも、我々の活けるリーダーを見つめて、そのみ業に参加しつゝ、進んでゆくのが、我々のこの短い生涯以上にわたる仕事です。一略—それだのに多くのクリスチャンも、これまでの世界も、勝手に簡単にキリストをかたづけ、卒業してしまひました。それだから今の世界に教へがなくなつてしまつたのです。

これまでにない強い口調で語るもと子の言葉には、切迫した時代状況をなんとかして打破したいとの思いを感じとることができる。しかし、この状況においても、もと子は神の国の建設を口にしながら、その国の具体的なかたちについては語らず、自身の宗教的な立場を述べるという姿勢をとつた。

もと子は「世界・文明・及び自由を語る」と題した『婦人之友』の座談会のなかで、「真の自由にはまた愛がなければなりません。然し我々はまだその道程にあるものですから、真の自由に憧がれて、どこまでも進まなくてはならないと思ひます。」³³として、自分達の事業がまだ発展途上であることを主張している。

また、吉一も同座談会のなかで、「『小より大へ』と私たちはいつてゐます。まづ家庭といふ小社会の中から理想を行ふ、学校といふ団体に、かくあるべき生活を実践するといふやり方です。勿論小に満足するのではなく、いつも大へ大へと隙を見ては打込むんで行くのです」³⁴として、自分達が展開する事業の理想を示してはいるが、具体的な社会構造についての言及はしていない。

1930年代に入り、羽仁夫妻は自由学園が創立10周年を迎え、雑誌事業も30年の節目を迎えた。これを契機として、先に述べた自由学園創立10周年記念にもみられる社会改造の気運が具体的なかたちになって展開されていくことになる。家庭生活合理化展は人々の生活に密着した、生活合理化による新しい社会の創造のため、「社会改造の第一歩」³⁵として開催された。

しかし、「社会改造の第一歩」と語りながら、その理想の社会の具体的なかたちは述べないという状況はどのように説明することができるのだろうか。

生江が記した1930年までの日本のキリスト教社会事業史の中心的な立場が、人間の内面の練磨と「絶えざる活動でなければならぬ」行為双方に裏付けされた、神の「『愛』を唯一の律法」とするものであったように、人の内面と生活合理化を重視した羽仁夫妻の目指す社会も、資本主義や共産主義といった明確な社会の構造についての方向性を指し示すものではなかったと考えることができる。

事実、「今の世界に教へがなくなってしまった」と嘆いていたもと子は、その教えがどのようなものを以下のように記している³⁶。

私の教といはうとしてゐるものは、親が子を、教師が学生を教へて、そのいふことを聞かせるのがそれだといふのではなく、新しい子供が古い親を教へて、分からなければ出て行くやうなものでもありません。またこれはよいものだからといふので、ある理想や計画を詰め込んで人を造るのでも

ありません。

他の一方において我々に大切な科学的研究の態度と共に、この生きた天地に、人を通し物を通し我々の歴史のすべてを通し、未来にかけける理想を通して、無限の「教」のみちみちてゐることがよく分かつて、大人も子供もその中で、共に学んで行く同志であるといふ、相互の敬虔な信頼の心です。それが教へられる心だと思ひます。

羽仁夫妻にとって、神の国の建設や神のみ業といった導きの手は、日々の生活のなかで、内なる自分の訴えを人と人との組織的な協力によって実現していく過程のなかに存在していたと考えることができる。だからこそ、羽仁夫妻が中心となって展開した社会事業には、考えるだけではなく、常に実行に移すことが求められたのである。

羽仁夫妻にとって重要なのは、一つに定めた社会構造に向って社会事業を展開するのではなく、現状の社会構造にある諸問題を見つめ、それを解決するために常に新しい社会を創り続けることであつたと考えることができる。このとき、新しい社会を考える際の精神的支柱となるのがキリスト教の思想だったのである。

もと子が友の会の立場を改めて明確に述べた1933年、羽仁夫妻は『婦人之友』の誌上に掲載された、「『学校』を語る」という座談会のなかで、自分達が次に展開しようとしている新しい事業への試みを以下のように述べている³⁷。

羽仁（もと子）—働きつゝ、学びつゝ、が本当の勉強ですね。自由学園では七年間で卒業します。でもそれがこゝでは卒業にはならないのです。それぞれのグループに入つて、社会的な仕事をして、各人が銘々の生活を、自活できるように立て、行きます。—略—それをこゝの大学にしようと思つてゐるのです。外の大学とは反対にこゝではそ

の仕事の方が先に始まっています。これをもっともっと進歩させて、自由学園大学にするつもりです。学校を七年間して出たからといって、そのまま、何處かへ消へてしまふといふやうなことは、こゝではないのです。卒業してから、本当の大学の勉強をしにこゝへ通つて来ます。勿論結婚して家を持ち、子供を育てながらです。

高良 —生活大学ですね。

為藤 —資格も年齢の制限もない人格本位の勉強が出来るわけですね。

羽仁（吉一） —一生を通じて勉強すればよいのです。年をとつてからも通つて来ます。子供を育てるのに忙しい間は休み、暇になつたらまた出て来ればよいのです。

—略—

羽仁（もと子） —さういふ新しい学校をつくる余地はいくらでもありますね。友の会でも生活学校といふのが各地で盛に開かれてゐます。短期のも長期のものもありますが、どれも働きつゝ、学びつゝ、です。東京でも洋裁を主としたものを開きましたが、申込みが多くて、随分断つたようでした。さういふ学校をすることも亦女性に適したよい働きです。かういふ風に自由に考へるとよい勉強はいくらでも出来るやうに思はれます。

「ファシズム」か「コミュニズム」かといった、どちらの社会構造を選ぶかで大きく揺れ動いた時代状況のなか、そのどちらでもありどちらでもないとする、第三のキリスト教社会事業に基づく道を羽仁夫妻は示したといえる。彼らの戦前期における社会改造運動には、①その対象が家族を最小単位とした日常生活の合理化にあったこと②多様な立場の人を受け入れられる素地があったこと③主に女性を中心に展開した社会活動であったという3つの特徴がある。そして、羽仁夫妻はこの時、一般の子どもから大人までも対象とし、卒業生には自身の子どもを自由学園に入学してもらえるように環境を作るといった、生活大学にみられる循環継続型の教育機関の完成を構想し、更なる発展を目指していた。

特定の社会構造を提示しない以上、どの社会構造にもあてはまる要素があるため、この社会改造運動は多くの人に参加することができる環境を形成していたといえる。言い換えれば、どちらの社会構造においても対応可能であったといえる。だからこそ、ある種中途半端にみえるその姿勢に対して「赤」だ、「ナショナリズム」だと批判を浴びることはあっても、政治的な立場を排除した絶妙なバランス感覚によって、「友の会」は設立わずか3年で会員数が4700人にもなったと考えることができる。また、自身の会社や知人、会員たち等から多くの情報を収集し、検討できる立場にあった羽仁夫妻は、あえて自覚的に中立な立場をとることで、厳しい時代をうまく乗り越えようとしていたと捉える事もできる。

しかし、羽仁夫婦が展開した社会改造運動は、一旦そのバランスがくずれると、どちらの社会構造とも適合できる要素を持っていたことこそが、一つの大きな問題を秘めていたと指摘しておかねばならない。それは、その団体の活動を最終的に指揮する者の意志一つで「ファシズムに足をとられかねない危険」³⁸を多分に含んでいた点である。

事実、斉藤（1988）のように、戦時下のもと子は、『『国に認められたい』』という心境の変化が生じ、政治的な立場を取り入れたことによって「国家というもっとも強力な政治機構に自ら進んでとりこまれ」たといった見解

もある³⁹。

羽仁夫妻が展開した、キリスト教社会事業に基づく社会改造運動が目指した理想の社会は、特定の人物による決定によって左右されるのではなく、そのバランスを自覚的に決断する大多数の市民なしには成立しえないものであったといえることができる。そして、それはどのようなかたちであれ、常に危うさがつきまとうものでもあった。羽仁夫妻の理想の社会とは、常に新しい社会を創り続けようとする幾重もの実践の蓄積とその過程から生み出される、かたちないものであった。

IV おわりに

本研究では、1930年代初頭の『婦人之友』にみられる羽仁夫妻、特にもと子の記事を中心とした、羽仁夫妻が目指した理想の社会を検討した。しかし、戦時下や戦後における一貫した調査からの歴史的検討ができていないといった課題がある。また、『婦人之友』だけでなく、他の雑誌における羽仁夫妻の言説を通して、その教育思想と社会事業がどのように結びついていたのかを検討する必要がある。さらに、羽仁夫妻だけではなく、各機関の中心物がどのような活動を展開したのか、キリスト教関係者との関わりはどのようなものだったのか。さらに、女子教育の歴史として、同学院はどのように位置づけることができるのか等、課題は山積している。まずは、自由学園における教育実践と社会事業との関連性を戦時下及び戦後の事業展開を含めた通史として検討していくことで、羽仁夫妻の事業の全体像を描きたいと考えている。

注

- 1 吉田 昇（1967）「第一次新教育運動における思想研究の意義」『教育学研究』第34巻第1号 1頁～7頁。その特徴として「こどもの個性尊重」、「教育の自由」、「画一的教育制度の否定」等があることから、戦前期に展開された新教育運動は現在まで続く教育の一つの出発点として考えられている。
- 2 中野 光（1968）『大正自由教育の研究』黎明書房 17頁。他の研究目的は日本の「新教育の目的は何」（同書、16頁）かと「自由教育におけるデモクラティックな側面がなぜ発展させられることなくファシズムの教育と結びついていったか」（同書、19頁）である。また、中野は「わたくしは、教育方法のみを総合的な教育現象からきりはなして考察するつもりはない。教育方法の近代化の過程のみを一直線にたどることによって、教育方法の発展史をすべて肯定することは、わたくしのとる立場ではない。教育方法の近代化は教育の民主化と結びついてこそ教育の発展に寄与できる、という立場をとりつづけたい。」（同書、18頁）とも述べてはいるが、中野以降の研究は教育方法の研究に偏ったものが多数である。
- 3 執筆者不明（1923）「宣言」『教育の世紀』創刊号 10月 Vol,1 No.1 教育の世紀社 3頁
- 4 磯田一雄（1976）『『教育の世紀社』の教育思想—『児童の村小学校』成立の背景として—』『国際基督教大学学報 I-A』教育研究 19 国際基督教大学 2頁
- 5 民間教育史料研究会編（1984）『教育の世紀社の総合的研究』一光社
- 6 前掲注2、204頁
- 7 福原 充（2014）「新教育学校の創立基盤—自由学園を事例として—」『日本教育史学会紀要』第四巻 日本教育史学会 20頁～47頁
- 8 前掲注2、268頁
- 9 中内敏夫（1976）「自由教育の終焉—児童の村小学校の解散」『季刊現代史』第8号 12月10日 56頁
- 10 本研究では、羽仁もと子の言説を中心に検討するが、筆者は羽仁夫妻の事業は

もと子だけではなく、基本的に吉一も含めた二人の共同事業だったという立場をとる。吉一は殆ど自身のことを記した書物を残していないという性質上、その思想を探るのは、もと子に比べ圧倒的に困難である。しかし、笠原（1979）をはじめ、いくつかの先行研究が指摘しているように、吉一が果たした役割は大きいものがある。笠原芳光（1979）「女を生かした男—羽仁吉一論」『抵抗と持続』鶴見俊輔・山本明編 世界思想社 22頁～52頁他

- 11 齊藤道子（1988）『羽仁もと子—生涯と思想』ドメス出版 326頁
- 12 羽仁吉一（1933）「雑司ヶ谷短信—建業三十年—」『婦人之友』第二十七卷 第一号 婦人之友社 320頁
- 13 執筆者不明（1911）「廓清会評議員」『廓清』第一卷 第三号 廓清発行所 141頁
- 14 執筆者不明（1911）「廓清会規則」『廓清』第一卷 第一号 廓清発行所 9頁
- 15 前掲注13、同頁
- 16 生江孝之（1931）『日本基督教社会事業史』教文館
- 17 同上、4頁
- 18 同上、7頁
- 19 同上、同頁
- 20 同上、8頁
- 21 同上、同頁
- 22 同上、同頁
- 23 同上、9頁
- 24 同上、同頁
- 25 同上、10頁
- 26 同上、10頁～12頁
- 27 『友の会レポート』第一号 友の会中央部 1931年5月25日 2頁
- 28 羽仁もと子（1932）「それ自身一つの社会として生き成長しさうして働きかけつゝある学校—沸国ニースにおける世界新教育会議講演」『婦人之友』第二十六卷 第十号 十月号 婦人之友社 41頁～43頁

- 29 同上、41 頁
- 30 同上、46 頁
- 31 執筆者多数（1933）「世界からなくしたいもの一本誌の質問に対する百四十六氏の回答一」『婦人之友』第二十七卷 第二号 二月号 47 頁～ 63 頁
- 32 羽仁もと子（1933）「友の会とは何ぞ」『婦人之友』第二十七卷 第五号 五月号 婦人之友社 36 頁～ 39 頁
- 33 執筆者不明（1933）「世界・文明・及び自由を語る」『婦人之友』第二十七卷 第九号 九月号 67 頁。なお、座談会出席者は以下の通りである。尾崎行雄、河合栄治郎、蠟山正道、羽仁吉一、羽仁もと子。
- 34 上記掲載誌、63 頁
- 35 羽仁もと子（1931）「生活合理化」『学園新聞』第五号 学園新聞発行所 九月一日 発行 頁数未記入
- 36 羽仁もと子（1933）「『教』のない世界」『婦人之友』第二十七卷 第十号 十月号 39 頁
- 37 執筆者不明（1933）「『学校』を語る」『婦人之友』第二十七卷 第十一号 十一月号 婦人之友社 70 頁～ 71 頁。座談会の出席者は以下の通り。「河井道子（恵泉学園長）、高良富子（日本女子大教授）、三宅驥一（理学博士）、野口援太郎（成城学園長）、為藤五郎（教育週報主幹）、羽仁吉一、羽仁もと子」（同誌、64 頁）。
- 38 前掲注 11、325 頁
- 39 同上、同頁

（児童館指導員）